



Title	<翻訳>朝食
Author(s)	ナーダシュディ, アーダーム; 尾野, 晏菜; 古川, 実咲 他
Citation	ハンガリー研究. 2025, 3, p. 145-148
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/100419
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

朝食

ナーダシュディ・アーダーム

朝食、これほど違いが出るものはない。
私たちがこの先何回朝食を食べることになるか、
そもそも今後朝食をともにするかが決まるからだ。
朝は妥協しがたいものだ。夜ならまだ
ひたむきに歩み寄れるだろうが、
朝は到底不可能だ。シリアルひとつとっても
何種類もあるのに、ベーコンもあれば、
あたたかい料理もあるわけで、朝食と
朝食の間には何光年もの隔たりがあって、
ピーマン丸かじりだとか、はちみつバターの
トーストだとか、どれもこれも結び合わせるなんて
どう足掻いても無理だ。それに量と時間の問題もある。
パンツ一丁で（なんなら素っ裸で）
食卓につくのか、はたまた慌てて靴を履きながら
一口つまみ、コーヒー片手に
トイレや洗面所、鏡へ向かうのか。
これらの助けとなるのはただひとつ、愛だ。

翻訳：尾野晏菜、古川実咲

監訳：築瀬さやか

A reggeli

Nádasdy Ádám

A reggeli a legnagyobb különbség:
ott dől el, hányat fogunk reggelizni,
s hogy fogunk-e. Mert reggel nehezebb
a kompromisszum: céltudatosan
alkalmazkodni este még lehet,
reggel soha. Többféle müzli van,
de van szalonna is, sőt melegétel,
fényévnyi távolság van reggeli
és reggeli közt, csípős paprika,
vagy mézes-vajas kifli, ezeken
átvergődni szinte reménytelen.
És még a mennyiség meg az idő:
ülve gatyában (sőt meztelenül),
vagy cipőhúzás közben beszaladni
egy falatért és bevinni a kávé
vécébe, fürdőbe, tükör elé.
Ezeket csak a szerelem segít.

Nádasdy, Ádám (2019) A reggeli. In: *Jól láthatóan lógok itt*. Budapest: Magvető Kiadó,
31.

1 ナーダシュディ・アーダームについて

ハンガリーを代表する詩人、言語学者。1947 年ブダペスト生まれ。現在はイギリスとハンガリーを生活の拠点としている。

エトヴェシュ・ロラーンド大学で英語・イタリア語を専攻し、1972 年から同大学の英語学科で教鞭をとった。言語学の分野では英語を専門とし、音声学、歴史言語学などを研究。その成果は『英語ってどんな言葉？』（2024 年）などの著作のほか、新聞、雑誌などでも広く知られている。

ナーダシュディの詩における重要なテーマは愛である（Litera 2022.1.）。日常生活における小さな出来事、ふとした瞬間に思い出される記憶、語り手を取り巻くモノや人の仕草が描かれ、それらに感情が投影される。文体はシンプルで、作品の結びに核心が記されることも多い（Menyhért 2006:33）。1984 年に初の詩集を出版、最新刊に『ボートが揺れる』（2024 年）、代表作に『細身にならなければならぬのに』（2005 年）がある。

また、「夏の夜の夢」「ハムレット」「ロミオとジュリエット」などを劇場からの依頼でハンガリー語に翻訳し、シェイクスピア作品の翻訳家としても有名である。

2 「朝食」の翻訳について

この作品の翻訳は、大阪大学外国語学部ハンガリー語専攻の開講科目において、2 段階を経て完成したものである。まず 2023 年度秋～冬学期「ハンガリー語学演習 Ib」（担当教員：クルジュリツ・タマーシュ）において、履修生である杉田ひとみ、町支梨花子、長尾理子、野田知里、古川実咲、本田竜都、松本梨央、三宅玲奈、宮田朋香、森菜月の 10 名が翻訳作業をおこなった。訳文は岡本真理教授が確認し、その後 2024 年度春～夏学期「ハンガリー文化演習 IIa」（担当教員：築瀬さやか）にて、履修生である尾野晏菜、古川実咲の 2 名が同訳文を確認・検討し、それを参考にあらためて原文から翻訳をおこなった。

本訳の掲載にあたり、作者であるナーダシュディ・アーダーム氏からは原文の掲載許可もいただいた。心から感謝申し上げる。

参考文献

Menyhért, Anna (2006) Nádasdy Ádám. In: Menyhért, Anna& Kiss, Noémi& Parragh, Szabolcs& Vaderna, Gábor (szerk.) *Kortárs irodalmi olvasókönyv: Szemelvények, íróportrék, bibliográfia. 2.kötet.* Budapest: Anonymus Kiadó, Balassi Bálint Magyar Kulturális Intézet, 33.

Nádori, Attila& Reményi, József Tamás (szerk.) (2014) *Britannica Hungarica Kisenciklopédia. Magyar irodalom.* Kossuth Kiadó.

Litera -az irodalmi portál, MAGAZIN (2022.1.31.) Nádasdy Ádám: Szükségét éreztem, hogy versben fejezzem ki az érzelmeimet. (Szekernyés, Tünde)

(<https://litera.hu/magazin/tudositas/nadasdy-adam-varosmajor-kolto.html>)

(最終アクセス：2024年11月28日)

Litera -az irodalmi portál, MAGAZIN (2022.10.4.) Miért mentél el? -Nádasdy Ádám.

(<https://litera.hu/magazin/interju/miert-mentel-el-nadasdy-adam.html>)

(最終アクセス：2024年11月28日)